

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡
—竹本正男 選手—

神 田 俊 平 (スポーツ文化・社会科学系)
大河原 裕 迪 (総合スポーツ科学研究センター)
波多腰 克 晃 (スポーツ文化学部／体育スポーツ科学系)
富 田 幸 祐 (オリンピックスポーツ文化研究所)

生年月日：1919 (大正 8) 年 9 月 29 日 (生) ～ 2007 年 (平成 19 年) 2 月 2 日 (没)

出身：島根県浜田市

競技：体操競技

【経歴】

- 1937 年 島根県立浜田中学校 (現島根県立浜田高等学校) 卒業
- 1940 年 日本体育会体操学校高等師範科 (現日本体育大学) 卒業
- 1940 年 日本体育会助手 (11 月 30 日付で休職, 12 月 1 日に陸軍第 5 連隊補充隊入隊)
- 1946 年 復員命令により帰国, 日本体育専門学校に復職 助教授
- 1951 年 日本体育大学助教授
- 1962 年 日本体育大学教授

【競技歴】

- 1936 年 全日本中等学校選手権：優勝
- 1940 年 全日本体操選手権：個人総合優勝
- 1946 年 全日本体操選手権：個人総合優勝 (～ 1951 年まで 6 連覇)
- 1950 年 日米対抗：鞍馬を除く 5 種目で優勝
- 1952 年 ヘルシンキオリンピック：種目別跳馬／銀, 団体／5 位
- 1954 年 第 13 回世界選手権ローマ大会：団体戦／銀, 徒手／金, 平行棒／銅
全日本体操選手権：個人総合優勝
- 1955 年 全日本体操選手権：個人総合優勝
- 1956 年 メルボルンオリンピック：団体戦／銀, 平行棒／銅, 吊環／銅, 鉄棒／銅
- 1958 年 国際体操競技会：個人総合／金
第 14 回世界選手権モスクワ大会：徒手／金, 団体／銀, 跳馬／銀, 鉄棒／銅
- 1960 年 ローマオリンピック：団体／金, 鉄棒／銀,
- 1962 年 第 15 回世界選手権プラハ大会：団体／金 (チームリーダー兼コーチ)

本稿は「研究プロジェクト：日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した調査をもとに構成されている。本調査は出身地である島根県浜田市にて2018年1月22日、23日に行った。

本調査では、浜田市教育委員会を初め、浜田市立中央図書館、島根県立体育館（竹本正男アリーナ）、浜田市浜田郷土資料館、島根県立浜田高校の方々に快くご協力いただきました。とくに資料の情報のみならず多方面にわたりご協力いただいた木原圭司氏に厚くお礼申し上げます。

1. 競技との出会い、オリンピックとの出会い

竹本正男氏は、1919（大正8）年9月29日、島根県浜田市に生まれた。半農半漁の村で生まれ育ち、子供の頃は海で泳いだり、得意な木登りをしたりと、日が暮れるのも忘れて遊び回っていたという¹⁾。竹本氏と体操との出会いは中学校のときである。1932（昭和7）年に島根県立浜田中学校（現島根県立浜田高等学校）に入学すると学校における柔剣術の熱気と小柄な体が大きくなるだろうと言う期待のもと、柔道部に入部することとなった²⁾。

私は強い者、体の大きな者に毎日、目茶苦茶に投げられていた。体のあちらこちらに擦り傷、アザだらけとなった。でも、投げ飛ばされながら、〈いざれ大きくなったら〉と我慢し続けた³⁾。

だが、一年たち、二年生に進級しても期待していた体はちっとも大きくならなかったのである。いや、単に袖だけの話で済んでいたならまだ我慢もできただろう。だが、僕は新入りの、一年坊主に投げ飛ばされる悲哀を味わうことになったのである。これはひどいショックだった。1年も練習してきた僕が入部ほやほやの一年生に投げられる。これは屈辱だった。厭気がさしてきて、もう耐えられそうもなくなってきた⁴⁾。

こうして竹本氏の期待は見事に打ち砕かれただけでなく、新入生に投げ飛ばされるという屈辱まで味わうこととなってしまった。しかしながら、そんな中、竹本氏は体操との運命的な出会いを果たすこととなる。

ちょうどそんな折、ある日の昼休みのことである。私に運命の瞬間が訪れたのだ。

弁当を食べ終わってクラスメートと連れ立ってグラウンドに出る。大地に埋め込まれた鉄棒にぶら下がって遊びだした。揃って蹴上がりに挑戦し始めた。周りの者はなかなかできない。踏んばり、顔を真っ赤にしてもがいている。そのなかで、僕は何度かの試みの後、先陣を切ってパツとできたのである。じきにきれいに決まるようになった。

そのとき僕は思ったのだ。

こりゃ自分に向いた運動ではないか！

それは例えれば、閃き、靈感のようなものではなかったかと、振り返ってみて思う。

初夏の頃であっただろうか、僕は柔道部を退めた⁵⁾。

こうして竹本氏は体操をはじめることとなった。といっても当時、浜田中学には体操部はなく、好きな者が4、5人集まって練習をする、現在で言うところの同好会であり、遊びを楽しむような気持ちで体操をはじめたようである⁶⁾。

当時、種目は鉄棒と跳箱の2種目だけであり、練習、大会は屋外で行われていた。そんな中、竹本氏らは自分たちで環境を整えながら練習に取り組んでいた。そして、夏休みには竹本氏のデビュー戦となる島根県中学選手権に出場することとなった。竹本氏はこのデビュー戦について以下のように回顧している。

僕は興奮した、しかし、アガって体が固くなることはなかった。とはいえ、技術の方がまだなんとも拙劣で、成績はボリのほうで終わってしまった⁷⁾。

僕にショックはなかった、それどころかその試合を通して刺激を受け、意欲は高まってきた。僕は知らず、体操の虜になりだしていたのである⁸⁾。

その後、翌年の1934（昭和9）年には浜田中学に竹本氏念願の体操部が誕生した。これを機に練習にも一段と気合が入り始めた。こうして更に体操にのめり込むようになった竹本氏は部活動の時間が終わって同級生が帰宅した後も一人で校庭に残って黙々と練習を行い、午後8時の最終列車に乗って帰るのが日課となり、休日にも必ず練習にかけ、手はいつも豆だらけであったという具合に、体操一色の生活を送るようになった⁹⁾。豊富な練習量と努力で実力は開花し、浜田中学時代には以下の戦績を残している。

1934（昭和9）年：浜田中学3年

県中等学校選手権：1位（個人）

明治神宮国民体育大会：3位（2部団体）

1935（昭和10）年：浜田中学4年

県中等学校選手権：1位（個人）、1位（団体）

1936（昭和11）年：浜田中学5年

関西中等学校選手権：優勝（個人）

中等学校東西対抗選手権：2位（個人）

全国中等学校選手権：1位（団体）、2位（個人）

こうして、体操の虜となり、華々しい体操人生をスタートさせた竹本氏であったが、体操に加えて竹本氏を虜にしたものがもう一つあった。オリンピックである。

第11回オリンピック・ベルリン大会が開かれていた。試合が終わって帰郷していた僕は友達と声を掛けあって、村の散髪屋に集合した。オリンピックのラジオ放送を聴きに行ったのである。（中略）競泳の様子が伝えられてきた。（中略）女子200メートル平泳ぎの決勝レースだった。それ

も終盤である。

「前畑ガンバレッ、前畑ガンバレッ！—」

熱狂、絶叫である。ゴール間近に、日本の前畑秀子（当時、椋山女学園）がドイツのゲネンゲルという選手と激しいデッドヒートがくりひろげられているのだ。

（中略）

世界相手の勝負、オリンピック。（こいつはすごいぞ！）目の前が覚醒されたかのようなだった。しかも、次の第12回オリンピック（1940年）は東京が舞台になるのだという。

僕の望みは一気にふくらんだのだった¹⁰⁾。

こうしたことから、竹本氏は浜田中学で体操、オリンピックとの運命的な出会いを果たし、来る東京オリンピックを目指すため、日本体育会体操学校（現日本体育大学）の高等師範科への進学を決めた。しかし、当時まだ器械体操がラジオ体操くらいにしか思われていないような状況もあり、そのために東京の学校に進学するなどという話を家族がすんなりと受け入れるわけもなく、父、兄たちに猛反対をされることとなった。本人だけで説得することはとても容易ではなく、当時浜田中学の体育教師で、運動部全体を見て回っていた横田勝之助氏に相談、協力を仰ぎ、ようやく許しを得ることができた。

2. 日体大での思い出（選手生活での思い出）

1937（昭和12）年、竹本氏は当時まだ大井町に校舎のあった日本体育会体操学校（現日本体育大学）の高等師範科に入学した。竹本氏が入学後、最初に苦労したことは寮生活であった。中でも上級生や教官による理不尽な体罰の制裁が一番嫌であったと当時を振り返っている¹¹⁾。体操部でもひどい目にあうことがあったという。当時軍国主義真っ只中の日本では、軍のみならず、各種学校を始めとした社会全体に体罰が横行していた。こ

うした社会状況の中、竹本氏はこの体罰について、当時を振り返りながら以下のように見解を示している。

些細な事にも難クセとしか思えないような理由をつけて殴ってくる。あるいは、1人で何か悪いことをすると連帯責任だと言ってみんなを並べ立て、容赦ない往復ビンタを浴びせてくるのだ。廊下でも長時間、腰のあたりまでしびれてくる正座もよくやらされた。(中略)僕ら下級生を苛め抜く上級生たち。彼らもまた下級生であったときに僕らみたいな目に遭わされていたのだろう。

しかし、僕は上級生になってもやるまいと思った。いいことだとは少しも思えなかったからである。いや、「加害者」を含めて、そのような体罰を心から本当に良いと考えることができる者はどれほどいただろうか。やられたからやる、周りがそうだからである。深い考えもなく、ある流れに流されてやる悲しい存在でなかったのではないだろうか。

僕は実際、上級生になっても体罰制裁をやることはなかった¹²⁾。

競技から話は逸れてしまったが、この一文からもわかるように、竹本氏はこの当時にして体罰について客観的に分析し、自身の行動に反映させている。この思考・判断能力が後の選手・指導者としての成功に大きく関わっているような気がしてならない。そして、自身は決してやらなかったというところに人格者である所以が垣間見える。

競技生活の方はというと、ロサンゼルス大会代表の佐々野利彦氏、ベルリン大会代表の有本六彦氏、曾根道貫氏といった指導者とともに技の研究や練習に打ち込んでいたようである。また、長期休暇となると学校から器具を借り出し、帰省先の浜田中体育館に設置して練習に励んだ。さらには、物怖じしない性格であったためか、いわゆる出稽古のような形で他校に出向き、練習を行っていた。やはり、浜田中学時代に培った「努力の人」をこ

こでも存分に発揮していたようである。

こうして来る東京オリンピックに向け、練習に励んでいたわけだが、1938年(昭和13)、第12回東京オリンピックは周知の通り、国の力のすべてを戦争に集結させるべく大会を返上させることが閣議決定された。このショックは東京オリンピックを目指し、無心に努力してきた竹本氏にとっては想像を絶するものであったことは後にご本人や関係者によって語られている¹³⁾。さらに、翌1939(昭和14)年に兵役義務が課され、兵役検査の結果甲種合格となる。しかし竹本氏はまだ学生であったため、1年延期して入隊することとなった¹⁴⁾。

1940(昭和15)年春には卒業を機に同校助手として務めることとなった。同年秋には体操の全日本選手権にとって代わるかたちで行われた国民体育大会で個人総合において自身初となる全日本チャンピオンとなった。しかしながらこの約1ヶ月半後、12月1日付けで、広島陸軍工兵第五連隊補充隊に入隊し、体操から離れざるを得ない状況となってしまった¹⁵⁾。

3. 体操への復帰とオリンピックでのメダル獲得

竹本氏は入隊後、広島で3ヶ月ほどの訓練を受けた後に中国の中支(現在の華中)に送られることとなった。戦況が激化する戦地において、幾度となく命の危機にさらされたが、1946(昭和21)年3月初旬、幸い元気な体で復員の途につくことが叶った。ご本人曰く、戦地でのことはあまり思い出したくない、そのくらい無惨な日々だったようである。しかしながら、元来体が強かった竹本氏は厳しい軍隊生活、生死を賭けた戦の中においても、戦友にうつされたことを除き、体を壊すことはなかったという強靱ぶりである¹⁶⁾。後に40代まで第一線で現役を続けることができた「強さ」をここに垣間見ることができる。

このとき既に26歳になっていた竹本氏にとっ

て、まず問題となったのは身の振り方であった。ご本人も当初は、就職難や食糧難で生活することすらままならない東京に戻るよりも地元浜田市に腰を据える気になっていた。もちろん、父や兄弟もその考えには大賛成であったようだ。しかし、ある日出征前に日体から家に送った荷物を整理していた時、ほどいた荷物の中からトレパンやシャツが出てきた。この時、竹本氏は強烈な郷愁に襲われ、6年もの長い間離れていた体操の世界が、生々しく蘇り、体操への復帰を心に決めることとなった¹⁷⁾。その当時の心境を以下のように語っている。

食べるものに不自由するくらいなんだ。私はもう戦地で一度は死んだ身ではないか。死んだ気になってやってみるんだ。もう一度もらった命、悔いなく生きてみよう¹⁸⁾。

父や兄弟は最初は反対したものの、この固い決意に心動かされ、許しを得ることができた。こうして竹本氏は体操に復帰すべく、上京することとなった。同時に、同年の4月1日付けで日本体育専門学校に助教授としての復職が認められることとなり、晴れて体操への復帰を果たしたのである¹⁹⁾。

当時世田谷の校舎は空襲で焼かれてしまっていたため、土浦の霞ヶ浦にあった航空隊跡地が仮校舎として使われ、兵舎や格納庫を教室や体育館として使用していた。食糧難も深刻であった当時、自分たちで畑を耕し、自給自足の生活をおくりながら、体操に打ち込む日々がはじまった²⁰⁾。

竹本氏は6年ものブランクがあったことから、当初はとにかく試合に出ることを目指して練習に励んでいた。その目標となった大会は戦後荒廃からの復興もままならない中開催された第一回国民体育大会であった。体操は大阪 YMCA の体育館が会場となった。ご本人によると、自身は「3番くらいに入れればもうけもんだな」と自身の順位を予測していたようだが、復帰第一戦で見事日本一に返り咲くこととなった²¹⁾。

こうして日本一に返り咲き、第14回オリンピック・ロンドン大会への出場を望んでいたが、日本はIOC（国際オリンピック委員会）やFIG（国際体操連盟）、から除名されていたため、出場は叶わなかった。1940（昭和15）年、1944（昭和19）年、は戦争のため中止となったため、竹本氏は日本一になってから計3回のオリンピックを逃したことになる。

オリンピック出場は叶わなかったものの、1950（昭和25）年、ようやく竹本氏に国際舞台に躍り出ることが叶った。日米対抗戦である。ロンドン大会出場の主要メンバーが来日したこの大会で竹本氏は見事に優勝を飾ってみせた。そしてこのことが大きな自信となった²²⁾。

そして、日本が戦後初めて出場したオリンピック・ヘルシンキ大会に竹本氏は堂々の国内予選トップ通過で出場権を得ることとなった。選考の結果選ばれたのは竹本氏の他、小野喬、金子明友、鍋谷鉄己、上迫忠夫の5名であった。実績のない体操は最大8名までエントリーできるところ、団体戦に最低限必要となる人数の5名での派遣となった。この大会で竹本氏は初めてオリンピックでメダルを獲得することとなる（跳馬：銀）。また、5名ギリギリでの出場となった団体戦においても5位の好成績を収めることとなった。

この大会中、竹本氏はソ連の圧倒的な強さを目の当たりにし、さらには父親を失うという悲報に接したが、それが打倒ソ連への執念に変わっていくこととなった²³⁾。

加えて、40代の選手が二人出場していても上位で活躍していたことから、自身も40代まで競技を続けること、そして現役のうちに絶対に勝つとの誓いを立てた²⁴⁾。

その後1954（昭和29）年の第13回世界選手権ローマ大会においては団体戦で銀、個人では徒手で金、平行棒で銅という成績をあげるが、この時点ではまだソ連との差が感じられたようである²⁵⁾。

1956（昭和31）年のメルボルンオリンピックでは、団体2位ではあったものの、優勝への確か

な手応えが感じられるようになった。続く1958（昭和33）年の第14回世界選手権モスクワ大会においては、集団食中毒の影響もあり、惜しくも団体優勝はのがしたものの、徒手で金、跳馬で銀、鉄棒で銅と、安定した成績を残した。

そして、満を持して臨んだローマオリンピックでは、日本史上初となる団体で金、鉄棒で銀メダルを獲得し、ついにソ連を倒し、世界一へと上り詰めたのである。「自由」、「規定」とともに制する完全優勝であった。まさに体操日本がここに誕生した瞬間であった。この当時の喜びを、竹本氏は以下のように回想している。

その夜、私は美酒に酔いしれた。酒好きのわたしだが、こんなにも美味しい酒があったのか、と思う。全身がしびれてくるような心地よさがあった。（中略）私は初めて出たオリンピック・ヘルシンキ大会で「40歳代への挑戦」と「自らが選手としてソ連を負かす」という二大目標を立てた。その念願を8年目にして、同時に達成したのである。体操の競技人生、最高の歓喜を心ゆくまで味わいたかった²⁶⁾。

竹本氏は初めて出場したヘルシンキオリンピック以降の話がされているが、それ以前の戦争による6年間のブランクや戦後復興がままならない中において達成されたことを考えると想像を絶する偉業である。

そして、その後、1962（昭和37）年に開催された第15回世界選手権プラハ大会に、チームリーダー兼コーチとして出場したのを最後に長き現役生活にピリオドを打つこととなった。

4. その後の人生

竹本氏は現役引退後、東京、ミュンヘン、モントリオールオリンピックにおいて体操日本代表チームの監督を務め、後進の指導にあたり、指導者としても世界一の選手を育て上げた。また、「月

面宙返り」の名付け親にもなった。

学生、教員として長期に渡って在籍した日本体育大学では副学長を務め、日本体操協会副会長の要職も歴任した。1997年には、日本人初となる国際体操殿堂（選手としてオリンピックや世界選手権で初めてメダルを獲得してから10年以上が経過し、引退後は20年以上、体操界に貢献していることが条件）入を果たした²⁷⁾。

5. 結びにかえて

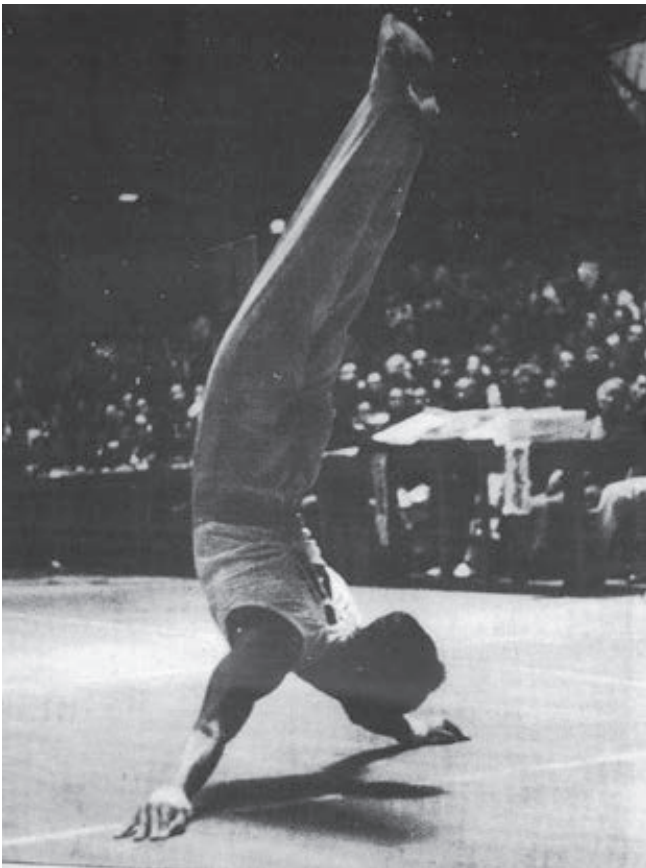
竹本氏にとって、体操は人生そのものであった。体操と出会ってから引退後に殿堂入りを果たすに至るまで、残した功績の数々はまさに竹本氏が「体操の神様」であったことにほかならない。本調査を行った浜田市においても、その偉大さは脈々と語り継がれているように感じた。

また、竹本氏の退任記念誌において寄稿された関係者の方々による竹本氏像をまとめると、「職人気質」「飽くなき探究心」を持ち合わせた「努力の人」、「義理堅く」、「人情に厚く」、「清廉潔白」であった²⁸⁾。多くの人々から寄せられたこの人物像、生き様こそが、竹本氏が後輩に残した最大のメッセージであろう。

引用・参考文献

- 1) 記念誌刊行委員会『わが体操人生 竹本正男教授退任記念誌』アイオーエム、1990年、p.7.
- 2) 同上書、p.9.
- 3) 同上書、p.9.
- 4) 同上書、p.9.
- 5) 同上書、pp.9-10.
- 6) 同上書、p.10.
- 7) 同上書、p.10.
- 8) 同上書、p.10.
- 9) 「浜田が生んだ体操の神様竹本正男の足跡②」『山陰中央新報』2014年2月14日
- 10) 前掲書1、pp.15-16.

- 11) 同上書, pp.18-19.
- 12) 同上書, p.19.
- 13) 「浜田が生んだ体操の神様竹本正男の足跡③」
『山陰中央新報』2014年2月15日.
- 14) 前掲書1, p.26.
- 15) 同上書, pp.26-27.
- 16) 同上書, p.33.
- 17) 同上書, pp.34-35.
- 18) 同上書, p.35.
- 19) 同上書, p.35.
- 20) 同上書, pp.35-36.
- 21) 同上書, p.40.
- 22) 「国際選手竹本正男 上」『山陰中央新報』
1982年6月3日.
- 23) 同上書
- 24) 同上書
- 25) 同上書
- 26) 前掲書1, pp.80-81.
- 27) 「体操は人生そのもの」『中国新聞』1997年7
月8日.
- 28) 前掲書1, pp.119-255.



十字倒立をする竹本氏



竹本正男氏（左）と上迫忠夫氏（右）

